巻頭言

「原体験」をキーワードに

岸井　勇雄

本誌二月号で繁多進氏が指摘されたように、人間やこの社会に対する愛と信頼――これほど一生を幸せに生きる力の根源に必要なものはないと思われるが、この深く、かつ高度な人格の中核は、まず、赤ちゃんらしい生活を十分にすることによって形成される。乳児が泣くたびに母親またはそれに代わる一定の保育者が、「ああよしよし」とやさしく声をかけながら様子を見、必要に応じて授乳やおむつの交換をする。これが夜中まで含めて一日に何度となく、三百六十五日繰り返されるのが乳児期というものである。この中で乳児は、自分が泣いて不具合を訴えると必ず、裏切ることなくまるごと取り上げて善処してく

れる人がいる、自分は愛されている、この世は信頼に価する、と体感し、人格の中枢に貯め込んでいくのである。

ある公立幼稚園が国の研究指定を受けて実践研究を行った時のことである。そのお手伝いに行ったところ、区の教育委員会の指導主事がその日の指導計画を見て、こんなことだから幼稚園はダメなんだと怒っていらっしゃる。それは、「ねらい」の一つに「気の合った友達と仲よく遊ぶ」とあったからだった。教育とは子どもをよくすることであるのに、気の合った友達と仲よくしたってよくすることにならないじゃないか。担任の先生が、ではどう書けばいいんですかと教えを請うたら、だから「気の合わない友達と仲よく」に決まってるじゃないか、と言われたのである。当時文部省にいた私は、教育委員会の先生とは連帯責任があるので、現場の先生の前では対立するわけにいかず困ったが、見過ごすわけにはいかない。

幼児教育については素人とお見受けしたので、将来だれとでも仲よくできるためにこそ、幼児期に気の合った友達ととことん遊び込んで、「お友達っていいもんだ。仲よくするって素晴らしいことだ」という原体験を十分に貯め込むことが大切なのだというお話をした。私たちが多少気の合いそうにない人とでも、自分から頭を下げて握手を求めることができるのは、「ひとたび仲よくなれば、あの素晴らしい世界が開ける」という原体験をもっているからである。それを、目に見えてよくする教育だけを考えると、担任の教師か

ら見て仲のよくないAちゃんとBちゃんを組ませて「仲よくしなさい！」と言うのは易しいけれども、その二人にとっての原体験はどういうものになるだろう。「仲よくするなんていやだ、お友達なんて面倒くさい、ひとりで遊んでいた方がずっといい」

――というマイナスの原体験になる。近頃は大人の管理のもとに早くから「だれとでも仲よく」という、結果として完成された姿を求めるために、かえって人間嫌いやいじめの原因につながっているとも考えられる。

その方は賢明、率直な方で、その説明を聞いて眼からうろこが落ちた、自分と同じように誤解している全国の教育関係者にぜひこの話をしてくれとまで言ってくださった。

人間の知識や技能は遺伝せず、すべて後天的学習による。自分たち大人は振り返って見ればわかることだが、自分が得意なことはそれだけやったことであり、不得意なことはやらなかったことである。そしてその分かれ目に幼児期の原体験があることに気づく。幼児は自分の中に育ってきた力を必ず使おうとする。環境の中にそれに当てはまるものを発見すると興味関心をもち、それに取り組む。それが楽しくて頑張ったものが得意になり、環境にそれがなかったり、したくないものを強制されたり、せっかくやっているものをそれじゃだめだと言われたりしたものが不得意になっているのだ。

幼児はどのような場合に楽しいかを洗い出し、次の十項目にまとめたことがある。

(1)自発・主体性の発揮（したいことをする楽しさ）(2)全力の活動（全力をあげて活動する楽しさ）(3)能力の伸長（できなかったことができるようになる楽しさ）(4)知識の獲得（知らなかったことを知る楽しさ）(5)創造（考え出し、工夫し、つくり出す楽しさ）(6)有用・善行（人の役に立つ・よいことをする楽しさ）(7)人格の承認（存在を人に認められる楽しさ）(8)共感（共感する楽しさ）(9)出会いと認識（よりよいものに出会う楽しさ）(10)愛・友好（好きな人と共にある楽しさ）

幼児期の楽しい思い出の有無は、生きる力の火種の有無に等しいと服部祥子氏が言われる通り、それ以前の乳児期を含め、生涯の人格形成に大きな影響を与える初期の体験としての原体験は幼児教育の核心をなす。目に見えぬ原体験の根の上に、知識・技能の系統学習を中心とする学校教育の幹が育つ。倉橋惣三先生が「生活の教育化」対「教育の生活化」と明確に対比されたように、両者を混同することなく、幼児教育の本質を求めていきたい。

（昭和女子大学）